

---

# Musician's Hand をめぐって

---

音楽家は手の動作に高度な巧緻性を求められる職業であり、その巧緻性の維持のために日々長時間の反復練習が要求される。このような特殊な環境下にある音楽家の手の障害の総称が Musician's Hand である。本来 Musician's Hand は楽器を演奏する身体側の手と、器械側である楽器の接点における問題であって、医学だけでなくバイオメカニクスの工学的観点も必要である。

今回は医学的な観点から、外傷、腱鞘炎、絞扼性神経障害からジストニアまで、疾患ごとに手外科医および脳神経内科医の先生方にご執筆いただいた。

冒頭で筆者が音楽家医学の歴史における Musician's Hand の関わりと音楽家のジストニアの概要について述べ、続いて喜多島 出先生に音楽家の手指骨折治療について、亀山 真先生に腱鞘炎について、吉田 綾先生および奥津一郎先生に絞扼性末梢神経障害について解説していただいた。

佐野和史先生には Heberden 結節をはじめ手指変形性関節症について形成外科の観点も交えてご説明いただき、音楽家のジストニアについては脳神経内科の長谷川 修先生にご執筆いただいた。

また Musician's Hand のリハビリテーションは音楽家の特殊な環境を踏まえて行うべきで、この解説を尼子雅敏先生および田村吏沙先生にお願いした。

さらに「手は脳の鏡」と言われるように、音楽家の手の障害には心理的因子も重要な要素であるため、これについて上原浩介先生にご執筆いただいた。

Musician's Hand は手による道具や器械操作全般に共通する面が多々あり、たとえばコンピュータのキーボード操作による手の障害は、腱鞘炎からジストニアまで、ピアニストと酷似した症状を呈することがある。Musician's Hand は単に演奏家や愛好家だけにとどまらず、手の巧緻動作を要するあらゆる職種に共通した、職業障害として捉えることができるのである。

したがって、その議論は手外科に新しい領域を拓く可能性がある。40 年前の 1980 年代に音楽家の手の治療に着目する医師はほとんどおらず、米国中東部で数名の医師による症例検討会が始まったばかりであった。その後、国内でも防衛医科大学校の根本孝一先生をはじめ複数の手外科医が現れ、学会の開催を経て今日では一つの専門分野を形成しつつある。

今後一人でも多くの医師がこの新しい分野の議論に加わり、さらなる発展を遂げることを祈念してやまない。

(酒井直隆)